

資料6 説教 『主、我らの義』

「その王の名は、『主は私たちの義。』と呼ばれよう。」（エレミヤ23章6節）

序

1 宗教についての論争は、何と恐ろしく、何と数多いことでしょうか。争いは、まことの宗教が何であるかを知らないこの世の子どもたちの間で起こるだけでなく、神の子どもたちの間で、すなわち「神の国がそのただ中にある」（ルカ17章21節）ことを体験した人々、「義と平和と聖霊による喜び」（ロマ14章17節）を味わったことがある人々の間にも起こるのです。神の子どもたちが共通の敵に対して立ち上がる代わりに、武器を互いに向けるようで多くの者が貴重な時間を無駄にし、互いの心を傷つけ、互いの力を弱め、主によってともに与えた偉大な御業の障害となってしまいました。こうしたことは、多くの弱い人々のつまずきとなりました。論争の故に、足の不自由な人の多くは道から逸脱し（ヘブ21章13節参）、罪人の多くは宗教全体を無視し、それを信じる人々を軽蔑し、また「地にある聖徒たち」（詩篇16篇3節）の多くは「隠れた所で、涙を流し」（エレ22章17節）てきました。

2 この痛ましい悪を排除し、神の子どもたちから争いを取り除き、平和を回復し、それを維持するためなら、神と隣人とを愛する人はだれでもいかなる努力も惜しまず、いかなることにも耐えることでしょうか。この価値ある目標を促進するためには、良心を傷つけない限りいかなるものも捨てることはできないとは考えません。また、たとえ私たちが「地の果てまでも戦いをやめさせる」（詩篇46篇9節）ことができないとしても、神の子どもたちすべてを和解させることができないとしても、それを目標にそれぞれが最善を尽くすべきです。人々の間に平和と神の御心とを少しでも推進させることができる人は幸いです。特に、善意ある人々の間で、また「平和の君」（イザ9章6節6）の旗の下に名を連ね、「自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい」（ロマ12章18節）という命令に格別に関わっている人々の間で、平和を確立することは幸いです。

3 善意ある人々が互いをより良く理解することができれば、それはこの栄光ある目標に向けての大きな一歩と言えましょう。多くの争いが、単に理解のなさ・誤解から生じます。争っている双方は、往々にして互いの言い分を理解しようとしません。そこで、双方に大した違いがないにもかかわらず、激しく互いを攻撃します。しかも、このことを彼らにわからせるのは、必ずしも簡単なことではありません。特に彼らが感情的になっている場合は、大変な困難が予想されます。しかし不可能ではありません。私たちは自分の力に頼るのではなく、私たちの全信頼をすべてのことができる御方に寄せて試みるなら、可能性はあります。主はすみやかに雲を追い散らし、彼らの心を照らし、互いを理解させ、「まさしく真理はキリストにある」（エペ4章21節）と納得させることができます。

4 この真理の中にある非常に大切な条項の一つが、冒頭のみことばです。「その王の名は、『主は私たちの義』と呼ばれよう」。これはキリスト教の本質に深く関わる真理です。

ある意味で、キリスト教の全体枠を享えていると言ってもいいでしょう。「主、われらの義」という真理と密接に関わるもう一つの真理を、ルターは *Articulus stantis vel cadentis ecclesiae*（キリスト教会がそれとともに立つか倒れるか）と呼んでいますが、疑いなくこの真理の条項についても同様に言うことができます。確かにこれこそが、唯一、救いを導き出すことのできる信仰の柱であり土台です。この信仰は、神の子どもたちすべてに見いだされる公同的、すなわち普遍的な信仰です。人は、この信仰を「全的に、また汚さずに保持しなければ、疑いなく永遠に滅びることになる」（アタナシウス信条参照）のです。

5 それ故、当然の結果として、他のいかなる点で意見を異にしている、キリストの御名を呼ぶ人はみな、この点において=致していることが期待できるはずですが、しかしながら、現状は全くそうではありません。キリストに従うと告白する人々の間で、これほど同意を見ることができず、これほど意見に開きがあり、妥協できないように見える教理はまれであると言っても過言ではありません。

ここで私が「……ように見える」とあえて言ったのは、相違は見かけ上のことにすぎないと確信しているからです。不一致は、心情的なものではなく、言葉遣いに原因があり、言葉においては離れていても判断においては互いは近くにいます。しかも言葉遣いの違いは、プロテスタントとカトリックの間にあるよりは、むしろプロテスタントの諸教派同士に存在しています。この違いは、信仰による義認の教理だけでなく、他の派の基本的教理の全般において一致している人々の間に見られます。

6 しかし、もし実際の体験ではなく意見において、しかも意見の内容そのものではなく、その表現の中に違いがあるとすると、その点でどうして神の子どもである人々が、そこまで激しい論争を戦わせているのでしょうか。いくつかの理由がありますが、その主要なものは、互いを理解していないということです。それぞれが自分の意見と、その固有の表現にあまりにも執着することが関係しています。

少しでもこの問題を除去するために、また互いを理解するために、私は神の助けを借りて以下のことを明らかにする努力をいたします。

一、キリストの義とは何であるか。

二、それがいつ、いかなる意味で、私たちに転嫁されるのか。

そのことを簡潔に私たち自身に適用して、締めくくります。

一

キリストの義とは何でしょうか。キリストの義は、キリストの神としての義と人間としての義の二重の意味を持っています。

1 神としての義は、キリストの神の本性に属します。キリストは、*ο ων*なる御方であり、「万物の上であり、とこしえにはめたたえられる神です」（ロマ9章5節）。キリストは至高なる方、永遠なる方であり、「その人間性においては父なる神に劣った存在であっても、その神性においては等しい」（アタナシウス信条参照）御方です。これがキリスト

の永遠の、本質的、不変的なホーリネスであり、キリストの無限の正義・あわれみ・真実であり、これらすべての点において「キリストと父なる神とは一つです」（ヨハ10章30節）。

しかし、私は、今ここで論じようとしている問題に、キリストの神としての義が直接に関わるとは理解していません。神としての義が私たちに転嫁されると主張する人など、全くと言っていいほどいないと私は信じています。転嫁の教理を信じている人はだれでも、主に（それだけでないにしても）転嫁されるのはキリストの人間としての義であると理解しています。

2人間としての義は、キリストの人間の本性に属します。「神と人との間の仲介者は唯一であってそれは人としてのキリスト・イエスです」（Iテモ2:5）。人としての義は、キリストの内的な義と外的な義の両方を含んでいます。キリストの内的な義は、そのたましいのすべての力と機能に刻印された神の像です。それは、キリストの神の義が人間の霊へと分与され得る限りにおいて、最大限に映し出されたものです。それは神的純粋性と、その正義・あわれみ・真実が転写されたものです。それは父なる神への愛・畏敬・服従・謙遜・柔和・優しさ・失われた人類に対する愛、他のあらゆる聖なる天的な気質を含んでいます。しかも、これらがみな最高度において何の欠点もなく、いかなる汚れも混じることなく、キリストの霊に映し出されています。

3 キリストの外的な義を論じるとき、キリストが何転誤ったことを行わなかったこと、いかなる種類の外的な罪も知らなかったこと、「その口に何の偽りも見いだされない」（Iペテ2章2:3節）こと、何一つ不適切な言葉を発せず、不適切な行動を取らなかったことなどは、外的な義の最も小さな部分にすぎません。ここまではその義の消極的側面にすぎません。もっとも、消極的側面でも、女性から生まれた者の中でこれほどまでの完璧な義に到達した者は、キリストを除いては存在しませんし、存在し得ないことは事実です。キリストの義は、それを越えて積極的な義でした。「この方のなさったことは、みなすばらしい」（マコ7章37節）のことば、御手の業、そのすべてにおいて、キリストは正確に「遣わした方の御心を」（ヨハ4章34節）行われました。地上生涯の全行程にあって、天の使いが天上で御心を行なうように、キリストは地上で御心を成し遂げられました。言葉も行いも、その一つの状況において完全に正しいものであり、その服従の全体を見ても部分を取り上酔でも完全でした。「このようにして、すべての正しいことを実行されました」（マタ3章15節参）。

4 さらに、キリストの服従はこれらすべてをはるかに越えていました。キリストの服従には何かを行ったというだけでなく、苦しみを受けられたということが含まれています。この世界に来られた時から「自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われ」（Iペテ2章2:4節）、世の罪のために完全な煩いを成し遂げ、「頭をたれて、霊をお渡しになる」まで、キリストは一貫して神の御心を受け入れておられました。これは通常、キリストの受動的な義と呼ばれ、先に述べたものは能動的な義と呼ばれています。しかし、キリ

ストの能動的な義と受動的な義とを実際には切り離すことができないのですから、私たちもあえてそれを切り離して論じる必要はありません。そのように考えることさえ不要です。これら二つを一つにして、イエスは「主、我らの義」と呼ばれているのです。

二

では、いつ私たちのだれもが「主、我らの義」と真実に言うことができるのでしょうか。すなわち、いつキリストの義が私たちに転嫁されるのでしょうか。それはどのような意味において転嫁されるのでしょうか。

1 世界を見渡してみましょう。そこにいるすべての人は、信仰者か不信者に分けられます。それは換言すれば、すべての信仰者にキリストの義は転嫁され、信じていない人々には転嫁されないということです。

しかし、いつ転嫁されるのでしょうか。それは信じる時です。信じたその瞬間にキリストの義は信仰者のものとなります。キリストの義は、信じるすべての人に、信じたその瞬間に転嫁されます。

信仰とキリストの義は切り離すことができません。というのは、だれでも聖書に従って信じる時、その人はキリストの義を信じているからです。信仰が真実であれば、すなわち私たちが義とする信仰は、必ずキリストの義をその対象としています。

2 信仰者がみな同じように話し、同じ表現をすることは限りません。それは期待できないことですし、それを要求することは妥当なことではありません等分自身を言い表そうとする時、それぞれが千差万別の状況にいるのですから、互いに違いが齎ことは当然です。しかし、表現 (expression) が違うからといって心 (sentiment) も違うわけではありません。さまざまな人々が違う表現を使いながら同じ事を意味していることもあります。よくあることです。もっとも、私たちはこのことを十分に考慮していないかも知れませんが。それが同じ人間の場合であっても、同じ出来事を時間を隔てて語る時、それに対する心は同じでも全く同じ表現はなかなか出てきません。そうであるならば、他人に対して自分と同じ表現を使うように要求することは、どれほど厳しいことでしょうか。

3 更に一歩進んで、表現だけでなく意見においても異なっているが、同じ貴い信仰と共に与っているということもあります。人は、今自分が受けている恵みを明確に把握していないこともあり得いく健全なものです。人々が生まれながら与えられた機能には、特にその理解力には、大きな開きがあります。しかもその開きは、その人の受けた教育のありかたによって、ますます広がるものです。

実に、このことだけでも種々の意見に莫大な相違を引き起こすことができます。そうであれば、他のさまざまな点と同様、こうした神学的な理解の面でも違いを引き起こすこととなります。しかし、その表現や意見が混乱していたり不正確であったとしても、その心が、愛する御子を通して神にしっかりと寄り添い、真実にキリストの義に傾いていることもあるわけです。

4 ですから、私たちは他の人々に対して、自分がその立場に立ったとすれば逆に望むで

あろう寛容さを、ことごとく与えるべきです。(再び一つのことだけを考えても) だれでも教育の持つ驚くべき影響力を知っているではないですか。知っていれば、義認の問題で明瞭に考え語ることをカトリック教会の人々に対して期待することが、きわめてむずかしいことを知っているでしょう。しかしそれでも、臨終の床にあったカトリックのベラルミン司教が、「あなたは、どの聖徒に頼るのですか」と尋ねられたとき、「**Fidere meritis Christi tutissimum**、すなわちキリストの功績に頼ることが最も安全なことです」と答えたのです。それを聞いて私たちは、彼はその誤った意見にもかかわらず、キリストの義に与っていたと断言できるのではないのでしょうか。

5 次に、どのような意味においてキリストの義が信仰者に転嫁されるのかを考えていきましょう。

信じる人はみな赦され、受け入れられます。それは、その人の中にある何かの故ではありません。それは、その人が過去において何かを行った故でもなく、ただ唯一キリストがその人のために行い、苦しまれたことの故です。強調しますが、その人の中にある何か、あるいはその人の行った行為の故、すなわちその人の義や行いの故ではありません。「神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、私たちを救ってくださいました」(テトス3章5節)。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。・・・行ないによるものではありません。だれも誇ることのないためです」(エペ2章8-9節)。救いは、全的に'そして唯一、キリストが私たちのためになされ、苦しまれたことの故に与えられます。私たちは「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められます」(ロマ3章24節)。そしてこれこそが、私たちが神の好意を獲得するための手段であるばかりか、その中に留まるための手段でもあります。この方法で私たちはまず神のところに来ます。そしてそれ以降同じ方法でいつも神のところに来るのです。やがて私たちの霊が神へ戻るときまで、この唯一の不変な「新しい生ける道」(ハブ10章20節)を歩みます。

6 これこそが、私が約28年間常に信じ、また教えできた教理です。私はこの教理を、英国国教会の『説教集』(Homilies)からの抜粋という形で1738年に世に向けて出版し、それ以来10から12版を数え、またこれと同じ趣旨の言葉で常に公言してきました。

私たちの義認に際して、三つの事柄が伴わなければならない。すなわち、神の側では神の偉大な慈悲と恵み、キリストの側では神の義の満足、そして私たちの側ではキリストが獲得した功績に信頼する信仰である。よって神の恵みは、義認における神の義を閉め出すことはなく、閉め出されるのは人の義、すなわち私たちの行いを根拠にする義である。

私たちがただ信仰によって義とされると言うとき、それは私たちの行いからあらゆる功績を取り去り、義認の功績と資格をすべて十字架のみに帰すことである。義認は、ただ神のあわれみのゆえに無代価になされる。この世のすべては罪の代価の一部たりとも払うことができないので神は御心のままに、私たちがそれに値したというのではなく-私たちのためにキリストの御身体と血とを用意され、それにより代価が支払われ、神の義が満足された。

それ故、キリス-が、真にご自身を信じるすべての者の義をのである。

(The Doctrines of Salvation, Faith,and Good Works,1.5,7:また'「メソジストの原則」-3-7を参照)

7 これから1, 2年して出版した賛美歌集も全く同じ趣旨を伝えています。この賛美歌も数版を重ねました (私の教理的な判断がそのときも同じであったことの証明です)。この教理に関わる詩を全部引用するなら、賛美歌集のほとんどをここに引用することになってしまいます。その中の一つを記しますが、これは七年後に再版し、また今から5年と二年前、そして数カ月前と印刷しています。

イエスよ あなたの血と義
それこそが 私の美 私の輝かしい衣です
燃え立つ世界のただ中で この衣に身をまとい
喜びとともに 私はこうべを上げます

"The Believer's Triumph,"st.1, Poetical Works ,I,346-これはもともとツインツェンドルフの賛美歌であり、ウェスレ-は1740年の賛美歌集に翻訳して載せている。)

この賛美歌全体が、始めから終わりまで、同じ気持ちを歌っている。

8 私は、義認についての説教を19年前に、そして7、8年前に再び出版しましたが、ここでも同じ事を伝えました。神の子が「すべての人のために死を味わわれた」(ヘブ2章9節) ことの故に、神は今や「この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせることをしない」(II コリ5章19節) のです。……神は、愛しておられる御子の故に、すなわち御子が私たちのためになされたことと苦しまれたことの故に、今はただ一つの条件によって(神ご自身が、その条件を果たす力を私たちに与えてくださいますが) 罪の報いである罰を免れさせ、私たちをその好意の中に再び受け入れ、永遠のいのちの保証として、死んだたましいを霊的ないのちに回復してくださいます(説教5「信仰による義認」1-8)。

9 私が昨年出版した『義認論』では、このことは、さらに広範囲に詳細に扱っています。(キリストの義を転嫁する) という表現は、キリストの義を(いわば) 神から受けることを意味する。ここで言うキリストの義とは、受動的服従と能動的服従とを含む。その義の代わり、すなわちその義によって獲得されたすべての特権・祝福・恩恵の報いを受けることになる。そこで、信仰者は転嫁されるキリストの義によって義とされると言うことができる。その意味するところは、神はキリストの義のために信じる者を義とされるのであって、その人の義のためにではないということである。……そこでカルヴァンは「キリストは、その服従によって私のために恵みを、すなわち父なる神の好意を獲得され、功績として手に入れられた」(キリスト教綱要』I・ii・17) と記し、また「キリストは、その服従によって私たちのために義を獲得され、買い取られた」(同III・xiv・17) と記している。さらに「私たちは神の恵みによって義とされる、キリストは私たちの義である、義はキリストの死と復活によって私たちのために獲得された、という表現はみな同じことを意味する」

(カルヴァン、ガラテヤ人への手紙3章6節注解参照)とある。すなわち、キリストの義、その能動的な義と受動的な義の両方が、義認における功績としての根拠 (meritorious cause) である。キリストの義は、私たちが信じる時、神によって義とみなされるという現実を神の御手から私たちに代わって獲得するのである (5頁)。

10 ここでおそらく、ある人々は反論するでしょう。「いや、あなたが主張しているのは、信仰が義として私たちに転嫁されるのだ」と。パウロはくり返しこのことを主張しているので、私も主張します。信仰、すなわちキリストの義を信じる信仰は、義として、すべての信仰者に転嫁されます。しかしこれは、既述のことと同じことです。というのは、その表現によって私が意味しているのは、私たちは行いによってではなく、信仰によって義とされること、すなわちすべての信仰者は、ただキリストが行い、キリストが苦しめられたことのゆえに罪が許され、受け入れられるということ以外の何ものでもありません。

11 「しかし、信仰者はキリストの義をまとい、それを着るのではないか」。疑いなくそうです。先に挙げた賛美の一節は、1人1人の信仰者の心からの言葉です。

イエスよ あなたの血と義

それこそが私の美 私の輝かしい衣です

すなわち、「あなたの能動的な義と受動的な義のおかげで、私は赦されて神に受け入れられた」ということです。

「しかし、私たちはキリストの一点の汚れもない義を着る前に'自分自身の義という汚れた衣服を脱がなければならないのではないか」。もちろんそうです。単純に言えば、私たちは「福音を信じる」(マコ1章15節)ようになる前に、悔い改めなければなりません。キリストを真実に頼みにするようになる前に、自分に依り頼むことをやめなければなりません。自分自身を正しいとするような自分の義に対する信頼をいっさい投げ捨てなければキリストの義に真実な信頼をおくことはできないのです。自分の行いに対する信頼から全く解放されるまで、キリストがなされ・苦しめられた事柄に徹底的に信頼することはできません。まず自分自身の中に死の宣告を受け、それから私たちのために生きて死んでくださったお方に信頼するのです。

12 「しかしあなたは、信仰者に固有な内在の義(inherent righteousness)を信じないのか」私は、それを本来かかわる領域内で信じています。つまり、自分のものとして内在している義を、神に受け入れられるための根拠(ground)としてではなく、その成果(fruit)として、転嫁される義の代わりにではなく、その結果として信じています。神は、義を転嫁されたすべての者の中に義を植え付けて(implants)くださると信じています。「イエス・キリスト7は神によって立てられて、私たちの義」ばかりでなく「聖めとなられた」(第1コリ1章30節)、すなわち、神は信じる者すべてを義とされるばかりか聖化してくださる、と信じています。キリストの義が転嫁された人々は、キリストの霊によって義とされ(made righteous)「真理に基づく義と聖をもって」(エペ4章24節)創造されたときの神の似姿にしたがって新しく造り直されるのです。

13 「しかしあなたは、キリストやキリストの義の代わりとして信仰を立てているのではないか」。決して、そうではあ-ません。私は、それぞれが本来かかわっている領域の中に置かれるように特別に注意を払っています。キリストの義は、私たちのいっさいの希望の完全かつ唯一の土台です。そして、信仰によって、聖霊がこの土台の I に私たちが建てることを可能にします。この信仰を与えてくださるのは神です。その瞬間、私たちは神に受け入れられるのですが、それは信仰の故ではなく、私たちのためにキリストがなされ壺しまれたことの故です。キリストの義と信仰のそれぞれがあるべき場所を持っていて、互いに衝突することは決してありません。私たちは信じて愛しへそして主のすべての戒めの中を責められることなく歩むように努めます。しかもなお、

このように 私たちは地上の
すべての時を尽くして
自分を捨て
キリストの義を隠れ場とする
主の苦難だけが
私たちの土台
罪の放しを 永遠の救いを
イエスの御名の中に見いだす

(Charles Wesley, "Hymns) Christian Friend 一一, No. 14, st. 4, Poetical Works, v. 424)

14 ですから私は、キリストの神性を否定しないのと同じようにキリストの義を否定しません。私がどちらかを否定していると正当に非難されれば、もう一方についても同じような非難を浴びることになるでしょう。また、私は転嫁された義を否定しません。これを否定しているという批判は不当なものです。キリストの義がすべての信仰者に転嫁されることを私はいつでも主張してきましたし、これからもそうします。いったいだれがそれを否定するのでしょうか。それを否定する人は、洗礼を受けていてもいなくても信仰のない人々です。それは、私たちの主イエス・キリストの栄光ある福音を巧みに仕組まれた作り話であると主張する人々です。それはソシヌス主義者とアリウス主義者、すなわち贖い主の至高な神性を否定する人々です。その結果彼らはキリストを単なる被造物とみなし、キリストの神としての義を否定します。そして彼らは、人はだれでも自分の義を根拠に神に受け入れられると信じているので、キリストの人としての義がだれかに転嫁されるということを否定します。

15 また、キリストの人との義を一少なくともその義を一罪人が神の御前に義とされるときの唯一の功績としての根拠(meritorious cause)として転嫁することをカトリック教会の人々カトリック教会の原理に忠実であるすべての人々は否定します。しかし中には彼らの体験が、実は彼らの考えている原理を越えていると思われる人々も多く見いだされます。こういう人々は、自分自身を正しく表現することはできなくても確かな事柄を感じているのです。表現するすべを知らないばかりか、この偉大な真理についての神学的な理解もき

わめて荒削りですが、彼らは「心で信じており」、今の「救い」のためにも、永遠の「救い」のためにもキリストだけに信頼しています(ロマ10章10節参)。

16 改革された諸教派の中で、通常神秘主義者と呼ばれる人々をこれらの人々とともに並べることができます。今世紀に入って(少なくとも英国で)神秘主義者の筆頭に挙げられるのがウィリアム・ロー氏でした。彼がキリストの義の転嫁を絶対的に、熱心に否定したことは周知のことです。その大胆な否定は、「転嫁された義などは、転嫁されたナンセンスだ」と言うことをはばからなかったロバート・パークレーに並びます。彼の思想を受け継ぐクエーカー教徒も、同じ気持ちを抱いています。いやそれだけでなく、英国国教会の一月であると公言する人々の大部分が、転嫁された義について全-の無知であり何にも知らないか、良き行いを阻害するとして転嫁された義の教理を信仰による義認の教理と共に退けてしまいます。これらの人々に加え、一般にアナバプテストと呼ばれる人々のかなりが、またジョン・アイラー博士の書物に啓発された何千もの長老派の人々と組合派の人々がいます。

これらの人々について、私は何ら判決を下すつもりはありません。創造者に任せるだけです。しかし、すべての神秘主義者(特にロー氏)、すべてのクエーカー教徒、長老派、組合派、また国教会に属する人々が、その意見や表現は明白でないにしても、彼らがみなキリスト体験を全く欠いていると主張することなどできるでしょうか。結果として、彼らがみな、罪に定められた状態にあり、「この世にあつて望みもなく、神もない人たち」(エペ2章12節)であるなどと言うことができるでしょうか。とんでもありません。その概念がどんなに混乱していようと、その表現がどんなに不適切であろうと、その心が神に向かって正しくあり、よって「我らの義である主」を知っている多くの人が存在することでしょう。

17 しかし神に感謝すべきは、私たちは、その概念と表現において彼らほど暗くはないということです。私たちは事柄そのものも、その表現も否定しません空かし、それを他の人に強要することには反対です。それぞれがより聖書的と思われる他の表現を用いることでよいでしょう。もっとも、彼らの心が、放しと恵みと栄光のためにキリストがなされ、苦しまれたことにのみ信頼していることが条件ですが。次に記すバーベイ氏の言葉ほど、私の思うところを的確に訴えているものはありません。それは金文字で記す価値があります。「私たちは、ある特定の表現に固執しているのではない。ただ、人が悔い改めた罪人としてキリストの足下に遜ればよいのです。ただ敬虔な受け手としてキリストの功績にのみ信頼すればよいのです。そうすれば、疑いなく人は祝された永遠への道を歩んでいくのです」

18 これ以上のことを言う必要が、また可能性があるでしょうか。この宣言に留まれば、「特定の表についての様々な論争は根絶されます。これです。「悔い改めた罪人として、キリストの足下に遜り、ただ敬虔な受け手としてキリストの功績のみに信頼する人はみな、祝された永遠の道を歩んで行くのです」。論争の余地はありますか。だれがこれを否定しますか。私たちはみな、この土台において一致するのではないのでしょうか。そうであるなら、この先何について言い争うというのです。ここで平和の人が、あらゆる論争グループ

に対して和解の条件を提案しています。私たちは、それ以上の条件を望まず、それを受け入れます。心からこの手で署名します。それを拒否する人には、しるしをつけておきましょう。その人は平和の敵であり、イスラエルを悩ます者、神の教会をかき乱す人です。

19 さて同時に、私たちが恐れているのは、(キリストの義)、あるいは(キリストの義が私に転嫁される)という表現を、だれかが自分の不義の隠れ糞にしたりはしないかということです。このように使われた例が何回となくありました。たとえば、ある人が酒に酔っていることを非難されたとします。すると言い返します。「そもそも私自身の義などはありません。キリストこそが私の義です」。またある人が、「略奪する者、不品行な者は、神の国を相続することができません」(I コリ 6 章 9-10 節参)と責められると、その人は確信を持って答えます。「私は自分自身にあつては不品行でも、キリストにあつて染み一つない義を持っています」。このようにして、クリスチャンとしての気質からも行いからもはるか遠くを生きていても、すなわちキリストの心を自分の心とせず、いかなる点においてもキリストが歩まれたように歩んでいない人も、自分なりの〈キリストの義〉を武具にして、あらゆる非難を退けてしまうのです。

20 この種の嘆かわしい実例をあまりに多く見かけるので、こうした表現を使うことに躊躇するほどです。そこで私は、これらの表現を頻繁に使う方々すべてに、私たちの救い主なる神の御名によって強くお願いしたいのです。あなたがたは救い主のものであり、救い主に仕えています。

ですから、あなたがたに耳を傾けるすべての人を、呪われるべき(キリストの義)の乱用からしっかりと守ってください。「恵みが増し加わるために、罪の中に留まる」(ロマ 6 章 1 節参) ことのないよう彼らに警告を与えてください(彼らは、あなた方の声なら聞くかも知れません)。「キリストを罪の助成者としないように」(ガラ 2 章 17 節参) 警告を与えてください。「堅くなければ、だれも神を見ることはできません」(ヘブ 2 1 章 14 節) という神の厳粛な命令を、キリストにあつて聖いという空しい想像によって無にすることのないように警戒を与えてください。彼らが不義に留まるならば、キリストの義は彼らにとって無駄になることを教えてください。キリストの義が私たちに転嫁されるのは、まさに「私たちの中に律法の要求が全うされる」(ロマ 8:4) ためであり、私たちが「この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活する」(テト 2 章 12 節) というためです、と大声で訴えてください(そうしない理由はありません)。

最後に、これらのことの適用を短く簡単に述べます。まず、キリストの義に関する表現に激しく反対し、その表現を使う人々をアンチノミアン(律法無用論者)として弾劾するような人々に申し上げます。これは、弓を反対の方向に曲げることにはなりませんか。自分と同じ表現で語ることをしない

人々を、みな弾劾する必要があるのですか。なぜ、自分の好む表現を使っていないということを利用して、彼らと喧嘩をしなければならぬのですか。あなたがたも、自由に自分の好きな表現を使っているでしょう。またそのために彼らがあなた方と争う姿勢をとっても、

あなたが嫌う頑迷さを真似てはなりません。少なくとも、彼らがあなたに与えて然るべき自由を、彼らにも与えなさい。またなぜあなたがたは、一つの表現に対して怒るのですか。「それが、乱用されてきたからだ」と言いますが、どんな表現でも乱用しようと思えば乱用されるものです。乱用を取り除き、同時に正しい使い方をすればよいでしょう。何にもまして、〈キリストの義〉のもとにはぐくまれている重要な意味をしっかりと保持してください。私が受けるすべての祝福、この世と永遠の貫とに対して私が抱くすべての望みは、完全に、そして唯一キリストが私のためになされたこと哀しまれたことを根拠としているのです。

次に、キリストの義にまつわる表現を好んで用いる人々に一言伝えおきます。はじめに尋ねますが、私は十分にあなたがたの主張を立ててきたと思いますが、いかがでしょうか。分別のある人なら、これ以上何を望むというのでしょうか。私はあなたがたが論じていることの全体的な内実を認めました一すなわち、私たちは「私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって」（Ⅱペテ1章1節）あらゆる祝福を得ているということです。私は、あなたがたが好む表現を、どのようなものでも、またそれを何度でも使うことを認めています。ただ、それらの表現の乱用の防止に深く心して欲しいのですが、それはあなたがたとしても同じことです。私自身、ここで問題になっている〈転嫁された義〉という表現を何度也使います。そして、この表現やそれに類似したものを、会衆全体の口にのぼるようにしています。しかしこれに関して、良心の自由を、また個人的判断の権利を私に与えてください。それが他の表現よりも適切であると私が判断するときを使うということで、許してください。二分ごとに特定の表現を使うことは適切でない私が判断したとしても、腹を立てないでください。あなたはそうされても私がそうしないからといって、責めないでください。私がそのように使わないからといって、私がカトリック教徒であるとか、「キリストの義に敵対する者」であると断言しないでください。私あなたがたに対してそうであるように、私に対しても寛大であってください。そうでなければ、私たちは「キリストの律法を全うする」（ガラ6章2節）ことができません。あたかも私が、キリスト教の基礎をくつがえしているかのように、騒ぎ立てないでください。そのようにする人はだれでも、私に対して大きな過ちを犯しているのです。主よ、その咎めを彼に負わせないでください。長年そうでしたが、私はあなたがたと同じ土台を据えているのです。そして、「だれも、すでに据えられている土台の他に、他のものを据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです」（Ⅰコリ3章11節）。あなたがたと同じように、私は信仰によって、この土台の上に内的聖め・外的聖めを建てます。ですから、私に対する嫌悪感や不親切、また遠慮や冷たさ、そんなものをあなたがたの心の中に育てないようにしてください。意見の相違があるとき、もし私たちが自分で考え、相手にも考えるところの自由を与えなければ、宗教はなくなってしまいます。私あなたがたを許すと同じように簡単に、あなたが私を許すことを邪魔をしているものがあるのですか。意見の相違ではなく、表現の相違となれば、もっと簡単に許すことができます。論争

のすべては、特定の表現形式がどれくらいしばしば用いられるかーただそれだけの問題なのです。こんなことを争いのもととする前に、まず、こんなことで互いに争いたいと本当に願っているのか考えてみることです。このような些細な問題で争うことによって、これ以上、私たちの共通の敵に神の名を汚す種を与えないようにしましょう。そのような機会をねらっている者に対して、機会を与えないようにしなければなりません。いま私たちは、（どうしてこれまでそうしなかったのかと反省しますが）私たちの偉大な主に仕えるために、互いの心と手を合わせるときです。私たちが持っているのは、「一つの主、一つの信仰、召しのもたらした望みは一つ」（エペ4章4～5節参）なのですから、神にある互いの手を強め合い、全人類に対して心と口を一つにして、「主、我らの義」を宣言しようではありませんか。